

# 共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」の 構想・経緯・成果

小池淳一

はじめに

本研究報告は二〇〇四～二〇〇六年度にかけて行われた国立歴史民俗博物館における共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」の成果をとりまとめたものである。この共同研究は単純には、日本民俗学の歴史について考察しようとしたものであったが、そこにはいくつかの含意があった。本稿ではそれを確認しつつ、共同研究の最終成果報告として、いくつかの視点と課題とを提示してみたい。なお、本稿においては敬称を全て略させていた。御寛恕をお願いしたい。

さて、ごく大まかに民俗学の歴史といっても、日本の民俗学においてはそれを問うことが当然であるという認識と、民俗学においてなぜそれを問わなければならないか、学問史は民俗学に近接してはいるが民俗学そのものではないのではないか、という素朴な疑問とが並立する可能性があるであろう。

まず、最初にそうした大きく隔たる二つの見解があること、そして、それらにまつわる問題を考えることが必要であろう。民俗学の歴史を問うことは当然である、という認識に対しては基本的に賛同するものの、それらがどういった方法や視座の広がりのもとに試みられるべきなの

か、といった議論はどこまで深められ、共有されているのか、といった点までを考えるといささか心許ないのではないだろうか。本共同研究はそうした点を意識して構想され実施された。

次に民俗学史は民俗学そのものではない、という見解については、いくつかの補助線を引くことで、そうした意識が持つ問題点が浮かび上がってくるだろう。まず、民俗学の研究の営為と学問としての発展過程とが全く別個に論じることができるか、どうか、という問いを発することが可能である。民俗学それ自体と近代日本における学問の形成とは、表面的に一方は固有の認識および思考の体系であり、一方は客観的な資料に基づく歴史学的な叙述であるという区分けが成り立つかに見える。しかしそうした学問論と学問史といった区分は、学問領域の形成と成果の流通とが渾然一体となった研究の実態に適用できるものではない。例えば、社会学史や人類学史は、歴史学の領域であって、社会学や人類学とは無関係であるということとは到底できないであろう。そうした見方は研究領域を特権化し、特異なものとして囲い込もうとした時に、認識論的な反論として胚胎する場合はあるだろう。しかし、学問の枠組みを形づくる固有、独自の概念の意義やその変化は、まず当該の学問のなかでの位置づけを考えなければならない。もちろん、素朴な意味で歴史を叙

述しようとする場合の資料処理の方法は基本的に歴史学の方法を用いるのであるが、それはあくまでも狭義の資料処理の技術の問題であって、人文学に広く共有されているものと言ってよいだろう。

民俗学の歴史的展開を考えるにあたって、歴史学を肥大させ、自己の属する研究領域の過去を創造的に読み直していく行為を遠景に押しやる必要はないのである。「歴史学の歴史学」である史学史が歴史学の領域であるとすれば、「民俗学の民俗学」は民俗学の領域でなければならない、とも言える。その場合の民俗学とは、現在の事実から、未来を構想するために過去を振り返る、という民俗研究の初志ともいべき認識をさす。いわば、広義の歴史の手法こそが民俗学の学史研究を貫くものでなければならぬ。

以下、本稿では、研究代表者を務めた筆者の共同研究の開始時点での認識を最初に掲げてみる。次いで、実際の共同研究がどのように実施されたかを振り返る。そして成果として、この特集号にどういった論考が寄せられているのかを確認して、本研究報告全体の序論としての意味を持たせたい。

### 一 共同研究の構想と射程

#### (一) 民俗学史の構想

本共同研究は、いささか大上段にふりかぶるならば、民俗学史の不在を是正し、さらにそうした歴史的な知見をふまえて、民俗学の現状をどのように認識するかという地点から構想された。

民俗学史の不在、という点、あるいは宮本常一（『日本民俗学の歴史』『民俗学への道』、一九九五年）、関敬吾（『日本民俗学の歴史』『日本民俗学大系（第二巻）』、一九五八年）、井之口章次（『民俗学研究の歩み』『民俗学の方法』、一九七〇年）、さらには大藤時彦（『日本民俗学史話』、一九九〇年）といった人々の業績を無視するのか、という疑問が起る

かもしれない。確かにこうした業績は、日本における民俗学の誕生と展開の軌跡を語り、その性質を説こうとした点において大いに注目すべきもののように思われる。その一方で、こうした「民俗学の歴史」は、民俗学史として物足りない側面を多く持っていることも確かなのではないだろうか。これらは、日本における民俗学の存在と特異性、有効性などを主張するものであり、その存在自体への疑問、存立基盤への照射、多元的な発展の可能性などについては十分に顧慮されていないように思われるのである。

近代社会のなかで、学としての民俗学はどういった知的営為のもとに形成されたのか。それ以外の、あるいは隣接類似する調査や研究の思想とはどういった点で異なっていたのか、さらに形成、組織化の過程で削り落とされた可能性とその理由、逆に採用された概念や術語の有効性を相対化しつつとらえ直し、人文社会科学の展開のなかに批判的に定位するのでなくては言葉本来の意味での「民俗学史」は描ききれないのではないだろうか。

「民俗学史」というのは、研究成果の羅列でもなければ、研究者の列伝でもない。ましてやそれらを取り混ぜて年表で平板に表現して済むものでもない。それらは、学的な営為のうちでもごく一部の把握し易く露頭している側面に過ぎないのであって（もちろん、それらが検討作業の中間報告的表現として必須であり、さらに入念に読み込んでいくべきテキストとして重要であることは否定しない）、近代における学問制度そのものが抱え込んできた限界や差異化を考え、構築し直す―再生する―ことを達成できてはいない。まして民俗研究のように反近代、超近代を標榜したり、それを期待されたりする知的作業にとつてはより掘り下げ意識化しておかねばならない成果のかたちとなる以前の思想や行動が存在する筈である。そのことが整理され、織り込まれてはじめて「民俗学史」となるのではないだろうか。

「民俗学史」とは、なぜ我々が民俗研究に興味と意欲を持ち、注目し、批判を加えてきたかを内在的に問うための舞台を設定するものでなければならぬ。民俗学史を問うことで我々の現在の偏向と不充分さを撃つものでなければ、好事家たちを、さらに好笑的に回顧するだけの作業に墮してしまふ可能性さえ持っている。なぜ、民俗学史を問う必要があるのか。それは柳田國男に収斂されるような自明性を排除し、日本近代において、民俗研究の形成過程をとらえ、そこにおける多様かつ柔軟な可能性を立体的に把握し、意識することが今後の人文社会科学のなかでの不可欠の作業だからである。近代の特定の時期、ある対象に対して民俗学だけがなぜ、有効であり、また学たり得たのかを、考える作業が民俗学史である。ここでは民俗学という名の存続にこだわらずに未来に向けて開いていく意志を根底に持つ必要がある。それには、民俗研究では捉えられなかった対象や現象とその原因をとらえること、いわば敗因の分析、民俗学そのものの自明性への疑いや他の学問―地方史・地域史や民衆生活史、歴史性を問う社会学、自文化を対象とする人類学―との差異の意識化と共同作業の模索も含められるべきだろう。

民俗学と呼ばれる営みが意味を持つのはどういった関係性のなかでのことなのか。その特殊性と普遍性とはどのように計測されるのか。ここで民俗学史という表現で問いたいのは、学説の時間軸に沿った整理ではもちろんなく、民俗を見出し、それを橋頭堡として思考や思想を展開することの意味や戦略を意識するということである。ここでは民俗学史の必要性、そして仮想であったとしても社会的な要請がどのように意識されたか、民俗学に結集した知性はどのような質と系譜とを持つものであったか、といった点について、その把握の方法を中心に考究を試みたいのである。

そしてそうした問題を議論の俎上に載せるために二つの切り口を想定してみた。一つは民俗学を支え、特徴づけてきた術語とそれに近接・

類似した他領域の術語を微視的にとらえなおしていくことであり、もう一つは民俗を見出し、そこから知的作業を構築していこうとした人々の軌跡を内在的に振り返り、その可能性を今日的に蘇らせることである。

## (二) 理念と術語―社会的な位相

民俗学史を捉えていく視座として、外在的、社会的な要請や必要性の主張という観点を最初に提出しておきたい。日本において近代化に対するアンチテーゼとして民俗学が胎生したことを例えば、『遠野物語』(一九一〇年)における「此書を外国に在る人々に呈す」といったことばに読み取ることはよく行われてきた。その後の近代社会史のなかで、民俗学が多くの人を惹きつけ、一種の運動体ともいえるかたちで展開し、戦後によりやく大学等の研究機関に席を占めるようになっていく過程は、民俗学の内部における成果の結実や柳田國男の卓抜した指導力、構想力に帰因するだけではなく、隣接する諸学や社会状況の要請という面もあった筈である。民俗学はそうした外延において最もはっきりとした相貌を持つようになったのではないだろうか。そのような民俗学の外部評価とでも言えるような視点を持つことが求められるだろう。

そうした外在的な観点として、基礎概念の史的検討を挙げたい。例えば「郷土」や「伝説」といった語は、ごく大まかにいって明治大正期には、民俗学内部が今日、了解している含意とはかなり異なった対象を指し、用いられ方をしていた筈である。そうした語の意味のある部分を削り、他の意味を追加したこと、あるいは中核的な概念に昇華させたり、目標として声高に問題提起することが、民俗研究を趣味から近代的な学問体系に転じさせていく大きな力となったのではないか。

学問における術語の形成と成長は、その指示内容を厳密に把握するだけではなく、その術語に限定されていく過程や類似の術語との差異を明確にすることで像を結ぶという面もある。独自の術語を周囲に張り巡ら

すことよって自閉するのではなく、張り巡らした網目の模様そのものを意識化し、対象化していくべきなのである。そこには当然のことながら、当時の社会状況や話題と学問内部の進展や共同して向かうべきであると認識された問題系とが絡み合っつて映し出されているだろう。

さらにそうした術語の問題には、関連諸学からの批評や期待が投影されているということにも注意しておきたい。近代日本の歩みのなかで、民俗学に対してどのようなイメージが付与されていたのか、そして人々は何を解明するものとして民俗学を認めたのだろうか。人文社会科学のなかで少しづつ、ずれながら共有していた対象や概念、術語—例えば、「歴史」や「文学」、「共同体」など—が、民俗学によってどのような局面を切り開くと考えられていたのかを問い直していかねばならない。そして、学問それ自体を社会史の文脈に解放していくこと、すなわち同時代史—同時代の思考と思想の枠組み—の中に位置づけ、座標を確認することで、社会的位相が見えてくるのではないだろうか、という期待を抱いている。

### (三) 人と場—内的な契機と組織

民俗学史を捉えていく第二の視座として、内在的な、民俗を研究対象に選び取っていった人間及び人間集団を把握することが重要であると考えられる。柳田國男を中核とする研究者の群像と動向とは従来も注意されてきたし、その深化が引き続き図られなければならない。しかし、そうした把握の一方で、民俗研究の発展をたどる視点はいささか硬直化し、極端にいえば柳田以外の可能性とその価値とは不問に付され、忘却されかけてはいないだろうか。いささか時期的に遅きに失しているかもしれないが、民俗を見つめようとしていた多くの知性の登録と検証に着手し、その意義に光をあてていきたい。

学問以前と見なされていた当時の民俗研究にどのような人々が引き寄せられていったのか、その人々の知的出自はどういったものだったのか、

そこで交わされた情報はどのような内容であり、そうした場はどのように形成、維持されていたのか。そうしたことを問うことは、単なる回顧ではなく、民俗学の根を確認することにつながっていくのではないだろうか。一例を挙げるならば、筆者は青森県史に関わる中で、八戸の郷土研究を多年にわたってリードした小井川潤次郎とその同志たちの蓄積と向き合う機会があった(その一部を青森県史叢書『奥南新報「村の話」集』(一九九八年)としてまとめた)。小井川がその主要な活動の舞台としていた八戸郷土研究会は、民俗学でも考古学でも歴史学でもない、一種の「郷土研究」としか呼びよれない知的活動を繰り広げていた。これを柳田が組織化していく民俗学—これも初発には「郷土研究」を名乗っていた—と比較すると何が見えてくるだろうか。見通しだけを述べると、そこには地域における総合史を目指すか、個別の学問の純化を目指すか、といった志向の差異とともに、小井川、柳田両者が身を置き、活動のベースとなった場の性質の違いが浮かび上がってくるのではないだろうか。こうした作業では、いくつかの地方における実践活動と柳田民俗学とを並行してとらえ、両者の価値観を等分に受け止めることが求められるだろう。

小井川と柳田とは、必ずしも根源的な対立をしていたわけではなく、それどころか互いの位置を認めあっていたふしがある。それは夏堀謹二郎をはじめとする八戸郷土研究会のメンバーが、『旅と伝説』にも投稿をしていることや、戦後の民俗学研究所を通しての科研費の獲得に小井川の長男である静夫が、東北地方における獅子頭の信仰を「権現様」として取り上げて、名乗りを挙げ、柳田たちから応援されていること(この辺りの事情は拙稿「権現様研究の周辺から」(『柳田國男全集月報』二一、一九九九年)に記した)などはそうした状況を裏づけるもののように考えられる。こうした事実からは中央と地方といった近代的な図式に民俗研究の個々の場と組織とを大まかに位置づけるだけでなく、そ

うした関係性や組織の中に埋め込まれていった発見や記述の様式やあるいは情報の流通や提示の作法を丁寧にすくい上げていく必要性を感じさせる。

本共同研究では、こうした体系化、学会としての組織化に至る個々の人間とそれらをとりにまく集団の質とを問い、さらに学問として形式を整えていくなかで、どういった力学が働いていったのかを、まず具体的な対象を見据えるところから問うてみたい。基礎研究と名乗ったのはそうした意味合いもこめてのことである。

#### (四) 本共同研究の組織

この共同研究は、以上に述べたような概念と術語といった学問の基礎となる言葉に注目して、その深度と揺れとを把握すること、人間と組織といった学問の展開に関わる場に注目して、その様相と位置づけとを明らかにしていくという二つの視点を意識することを骨格として構想、準備された。

そして、共同研究員として、参加していただいたのは、次の方々である。こうしたメンバー諸氏のこれまでの、そして現在の調査研究をそうした側面から見直すことで、一定の緩やかなつながりを見いだすことが可能ではないか、と考えたのである(館外、館内に分け、それぞれ五十音順、括弧内は、所属〔発足時〕と専門)。

#### (館外)

- 川田 牧人(中京大学社会学部・文化人類学)  
 川村 清志(札幌大学文化学部・民俗学)  
 姜 竣(城西国際大学人文学部・民俗学)  
 菊地 暁(京都市大学人文科学研究科・民俗学)  
 佐藤 健二(東京大学人文社会科学系研究科・社会学)

重信 幸彦(北九州市立大学基盤教育センター・民俗学)

田中 正明(二松学舎大学・民俗学 二〇〇五年)

鶴見 太郎(早稲田大学文学部・日本近代史)

戸塚ひろみ(日本民俗学会会員・民俗学)

真鍋 昌賢(大阪大学文学部・民俗学)

山田 巖子(弘前大学人文学部・民俗学)

和田 健(千葉大学国際教育センター・民俗学)

#### (館内)

上野 和男(本館研究部・民俗学、社会人類学)

久留島 浩(本館研究部・日本近世史)

小池 淳一(本館研究部・民俗学、代表)

常光 徹(本館研究部・民俗学)

松尾 恒一(本館研究部・民俗学、芸能史)

安田 常雄(本館研究部・日本近代史)

山田 慎也(本館研究部・民俗学、副代表)

## 二 共同研究の経緯

こうした構想と組織によって、本共同研究はスタートした。三年間にわたって十二回の研究会を開き、また共同研究員の他にも積極的にゲストスピーカーを招いて、研究の深化と多角化を図った。具体的な研究会での発表題目と会場は以下の通りである。

### 二〇〇四年度

◇第一回研究会(国立歴史民俗博物館、以下、歴博と略記) 八月二八―二九日

小池 淳一「本共同研究の構想と目的」

重信 幸彦「柳田」は舞い降りたく地域的リテラシーの実践と「民俗」

研究・小倉郷土会の一七年から」

◇第二回研究会（遠野市蔵の道ギャラリー、遠野市立博物館）一〇月一七日～一八日

姜 竣 「柳田國男における「近代」の可能性と民俗学の再想像―

自然主義文学、農政学、ナシヨナリズムを通して―

小池 淳一 「石橋臥波の『民俗』と佐々木喜善の『民間伝承』―雑誌

研究の方法を考える―

◇第三回研究会（KKR白浜荘、南方熊楠記念館）一二月二六日～二七日

川村 清志 「メディアのなかの民俗―表象技法とフォークロリズム―

佐藤 健二 「『郷土誌論』の誕生と南方熊楠―

二〇〇五年度

◇第一回研究会（歴博）五月二八～二九日

山田 巖子 「『福子』再考―記述の『場』をめぐる―

山田 慎也 「民俗学における葬制研究―

◇第二回研究会（京都大学人文科学研究所、柳田國男の会と合同開催）

七月三〇～三一日

加藤 秀俊 （ゲストスピーカー）「京都でまなんだ柳田國男―

菊地 暁 「主な登場人物―京都で柳田國男と民俗学を考えてみる―

土居 浩 （ゲストスピーカー）「三つ子に鮎鮎―昭和七年・京都にお

ける民俗学／土俗学について―

鶴見 太郎 「戦後京大派における柳田民俗学受容―

林 淳 （ゲストスピーカー）「文化史学と民俗学―

◇第三回研究会（山形県南陽市夕鶴の里資料館）九月二三日～二五日

戸塚ひろみ 「柳田國男の手紙―昭和一六年朝日文化賞受賞前後―

佐々木達司 （ゲストスピーカー）「私の口承文芸研究―関敬吾・鈴木棠

三両先生の手紙に導かれて―

常光 徹 「俗信再考―

武田 正 （ゲストスピーカー）「昔話の語り手と聞き手―

◇第四回研究会（歴博）一二月一九～二〇日

小池 淳一 「伝説研究の課題―「創られる伝説」特集の意図―

久留島 浩 「創られる伝説―歴史意識と説話―を読んで―

姜 竣 「柳田國男における伝説という問い―「特集・創られた伝

説―歴史意識と説話に寄せて―

田中 正明 「『柳田國男の絵葉書』その他―

◇第五回研究会（愛知県立大学サテライトキャンパス、柳田國男研究会

（欠片会）と合同開催）

小池 淳一 「地方における民俗学徒―岡崎人・杉本舜市の場合―

井上宗一郎 （ゲストスピーカー）「相撲」研究の可能性―民俗学にお

ける「相撲」のあり方をめぐって―

和田 健 「石黒忠篤と民俗学をめぐる周辺（その一）―

二〇〇六年度

◇第一回研究会（歴博）五月二七～二八日

山下 欣一 （ゲストスピーカー）「南島研究と私―

上野 和男 「家・宮座・先祖祭祀―坪井洋文の社会組織研究―

安室 知 （ゲストスピーカー）「坪井洋文にとって稲とはなんだった

のか―畑作文化論と歴博展示から―

コメント・篠原徹

◇第二回研究会（札幌大学）六月一〇～一一日

真鍋 昌賢 「民俗芸術」再考―概念の成立とその背景を中心として―

菊地 暁 「郡司文庫覚書―民俗文化財保護との関わりから―」

◇第三回研究会（歴博）七月二九～三〇日

飯倉 照平 （ゲストスピーカー）「南方熊楠と民俗学研究」

室井 康成 （ゲストスピーカー）「柳田國男と選挙粛正運動」

川田 牧人 「視覚の科学」としての文化人類学と民俗学―「見ること」をめぐって―

◇第四回研究会（歴博）三月一〇～一一日

小池 淳一 「本共同研究の回顧とあらたな課題」

成果報告にむけての総合討論

共同研究の運営のなかで代表者である筆者が意識したのは、議論をなるべくオープンにし、共同研究員以外の参加者を積極的に受け入れるということであった。共同研究員の自主性も当然のことながら最大限に尊重し、関連する研究に取り組んでいる大学院学生や知友にも歴博の共同研究という場を開いていくように努めた。

そしてそのことをさらに促し、実効のあるものとしていくために、歴博以外の土地での開催を積極的に企画し、さらに関連する研究会等との合同での開催を意識して増やすように努めた。その結果、遠野市立博物館、南方熊楠記念館、山形県南陽市夕鶴の里資料館、札幌大学図書館などでの見学とそれを踏まえた討議が可能になり、柳田國男の会、柳田國男研究会（欠片会）などとの合同討議が行われ、議論の幅が広がった。

研究成果のプライオリティの問題はあるものの、共同研究の進行過程を広く学界や地域社会に公開し、多様な立場からの意見を受け止めつつ、運営していくことは歴博の共同研究全体にも関わる重要な姿勢であると考える。

### 三 共同研究の成果

こうした三カ年にわたる共同研究の成果は、さまざまなかたちでまとめられている。第二次の第二回研究会（京都大学人文科学研究所）で展開した内容は柳田國男の会の『柳田國男研究論集』四号（二〇〇五年）に、その一部が掲載されている。また二〇〇七年度には歴博フォーラムとして「民俗学の行方」（二〇〇七年一月一日、東京大学本郷キャンパス）を開催した。その内容をさらに拡充、発展させた論集として『民俗学的想像力』（二〇〇九年、せりか書房）も刊行している。その目次を次に示しておこう。

#### 問題提起

小池 淳一 「民俗学史は挑発する」

#### I 民俗研究の構想

室井 康成 「常民」から「公民」へ―〈政治改良論〉としての柳田民俗学―

山田 巖子 「民俗と世相―「烏訃なるもの」をめぐって」

川村 清志 「都市民俗学からフォークロリズムへ―その共通点と切断面」

〈コラム〉田中正明「柳田國男と家族」

#### II 人と場

鶴見 太郎 「方法として見る民俗学者の人生」

小池 淳一 「町・職人・統計―小島勝治論序説」

重信 幸彦 「『野』の学のかたち―昭和初期・小倉郷土会の実践から」

菊地 暁 「敵の敵は味方か?―京大史学科と柳田民俗学」

〔コラム〕山下欣二「奄美研究への希求とその道程―私的な回顧から」

### III 対象と認識

姜 竣 「社会的なるものへの意志―柳田國男の〈郷土〉」

和田 健 「明文化・系統化される民俗―農山漁村経済更生運動初期における生活習俗の創造」

真鍋 昌賢 「民俗芸術をめぐる想像力」

展望

佐藤 健二 「方法としての民俗学／運動としての民俗学／構想力としての民俗学」

あとがき（小池淳一）

ここでは、田中正明、山下欣一といったすでに民俗学史上の重要な存在である研究者にあえてコラムというかたちでの寄稿をお願いし、一方で比較的若手の共同研究員や本共同研究のゲストスピーカーに論考を書き下ろしてもらっている。

フォーラムのタイトル「民俗学の行方」が共同研究の内容とどのように対応しているか、そして、さらにその書籍化にあたっての新しいタイトルおよびそれらに含意されている問題意識については『民俗学的想像力』の問題提起やあとがきに直接あたられたい。ここでは、共同研究の

成果の発展的内容発信をフォーラムおよびそれを受けての単行本として既に世に送り出していることだけを確認しておきたい。

さて、本研究報告の概要について最後に述べて、いささか長くなってしまう序論を閉じることとしたい。本研究報告は、大きく四部構成とし、第I部を「学史研究の可能性―方法と射程」とした。ここでは佐藤健二による学史研究そのものの必要性や構造化への提言、小池の基本的な雑誌研究の視角の提示とその基礎作業を論じた論考を配し、さらに人類学の方法意識で民俗研究を照射する川田論文を加えた。また柳田民俗学のキーワードの一つである「事大主義」をめぐる室井論文を配している。

第II部は「人と場、交流の力」として、雑誌とそれに集う人々の動きとその意義をとらえた真鍋論文、近代農政の重要人物である石黒忠篤から民俗研究を照射する和田論文、国語学・言語学の新村出と柳田國男との交流とその意義を資料紹介を基礎としながら考察する菊地論文を配してみた。

第III部は「術語と概念の地平」として、「民謡」を取り上げる川村論文、「福子」概念が指定されるコンテキストを注視する山田（巖）論文、研究対象としての「相撲」を再考する井上論文に加えて、松尾恒一の柳田國男と「芸能」研究と関連の再検討、山田慎也による「葬制」が研究領域として浮上してくる過程への注視、常光徹による「俗信」概念の定位の時期とその背景の探求を配してみた。

第IV部は「資料と証言」として民俗学史における研究の回顧やこれまでに未紹介であった資料を配した。武田正「昔話の語り手と聞き手」は山形県下の昔話をはじめとする口承文芸調査を百冊を越えるガリ版刷の昔話集の編集刊行を通じて押し進め、さらにそれを基盤に昔話研究に斬新な視角を提示してきた武田の回顧譚である。民話運動と微妙な距離を保ちながら、地方において、また地方だからこそ、可能になった昔話調



査とそこから結晶していく思考の軌跡が語られている。

佐々木達司「口承文芸調査の五〇年」は、同じ東北でも青森県において口承文芸の調査・研究を牽引してきた佐々木が関敬吾、鈴木棠三といった研究者からどういった手紙を送られ、それが佐々木自身の研究にどのように反映してきたか、を記述してもらっている。

鶴見太郎「肥前五島遊記」解説」は昭和三年の橋浦泰雄による長崎県五島列島の調査日誌の翻刻と紹介によって、橋浦の研究姿勢、人脈の作り方に焦点をあてている。

戸塚ひろみ「学問で国を濟ふ日」は柳田の民俗学構想の体現者でもあった倉田一郎の許に寄せられた柳田の書簡を注解とともに整理している。

最後の田中正明「柳田國男の著作・著作収録書書誌」は膨大な柳田國男に関する書誌データの提示である。こうした入念な基礎作業の上に民俗学史研究が構築されるべきであるのは当然であろう。しかし、そうした当然の作業こそが最も難しいこともまた事実である。ここにはその良質の作業成果が結実している。

## おわりに

以上、共同研究の報告として、共同研究の計画段階から実施、さらに成果のとりまとめについて述べてきた。

全体を通じて、民俗学の歴史を未来に向けて考えるための指標を述べ、その階梯のうちのいくつかを実際に築きつつあることを主張したつもりである。もちろん、ここに寄せられた論考や資料の数々は民俗学史研究に意欲を持つ読者によって読み解かれた時に初めて意味を持つ。そうした読者に向けて共同研究の最終報告を送り出す。そして読者諸賢の生産的な批判を得て、さらに次の段階へと進んでいくことを念願している。そうした点からすれば、本特集号の内容が読者に届き、読者とともに次の民俗学史構築の作業の礎となった時に共同研究は真の意味で総括され

たことになる。その日が近いことを期待しつつ本稿を閉じることとした。  
い。

(国立歴史民俗博物館研究部)